

## 【研究論文】

# グローバル人材育成を目指す異文化理解授業

広島文教女子大学人間科学部

グローバルコミュニケーション学科 講師 岩 下 康 子

## 1 はじめに

Edward.T.Hallが1959年に著した「Silent Language」が異文化コミュニケーション研究の始まりと言われて半世紀以上がたつ。これまでの多くは異文化コミュニケーションを国籍単位として考え、国家間の相互理解に焦点がおかれ論じられてきた。それは、政治や経済背景と連動していることは疑いの余地もなく、私が実践した異文化シミュレーションゲームも元々はアメリカ軍隊の異文化適応のために開発されたという経緯がある。

しかしながら、インターネットの普及により私たちの生活は変化を余儀なくされ、異文化の概念においても変化がもたらされた。国家単位の異文化研究に違和感が生じ、研究の多くが文化本質主義的なものに基づいていることに対する批判が起こり、マージナルな少数派の視点からコミュニケーションのあり方を考えることが必要だとの見方が進められてきたのだ。

すなわち、異文化コミュニケーションを考えるうえで、性別、年齢、人種、民族、階級などの共文化を単位とする考え方が重要視されるようになってきた。日本社会の中に存する多種多様な価値観、文化背景を個人のアイデンティティと絡めながら論ずることが求められている。異文化とは、国や言語の違いだけを意図するものではないことを念頭に置いて、異文化理解授業を進めていくことが必要とされている。日本の外にある国家についての大枠を論ずることが「異文化理解」であってはならない。私たちの身の回りにある異文化に着目し、私たちの生活そのものが異文化コミュニケーションの連続であるという前提において、授業を組み立てる必要がある。毎日の生活を振り返ることから、異文化理解は始まっているからだ。

さて、グローバルという言葉であるが、すでに耳にすることが多くなって久しい。もともと、企業が使い始めたグローカリゼーションという造語が浸透し、やがてグローバルという新造語が生まれ、今ではどちらも時事用語辞典に掲載されている。Wikipediaでは、『全世界を同時に巻き込んでいく流れである「世界普遍化」(globalization)と、地域の特色や特性を考慮していく流れである「地域限定化」(localization)の2つの言葉を組み合わせた混成語』だと定義されている。あるいは、「地球規模で考えながら、自分の地域で活動する」(Think globally, act locally.)とも関連する言葉、と表記されている。(出典: Wikipediaグローカル化)

前出の「異文化コミュニケーション」をグローカルの視点で行うことは、現在どの大学も取り組みに力を入れている分野である。文部科学省が最重要課題の一つとして「グローバル化した社会で活躍する人材を育成することを喫緊の課題とし、異文化理解の促進やアイデンティティの確立といった国際的素養を培うことが重要である」と明記している通りである。(文部科学白書, 2013, 第4節) さらに、大学の国際化を進めることが不可欠であるとし、日本人学生の留学を推進する大学支援事業「Go

Global Japan」や戦略的に重要な国や地域の大学との質保証を伴った学生の双方向交流プログラム構築支援を行う「大学の世界展開力強化事業」を実施している。こういった背景を踏まえて、本学の異文化理解授業は展開していくことが求められている。

## 2 異文化の押し寄せる広島現状

グローバル化の急進にともなう、日本国内も多国籍化が加速している。本学のある広島県は前年約4万人の外国人住民が共住しており、そのうち8割がアジア圏からの移民である。厚生労働省の予測では、日本は2050年までに1700万人のマルチカルチャー背景を持つ移民を受け入れる国になる。内閣は、今後年間20万人の移民受け入れを認めていく方針を打ち出した。同時に教育の世界もこの10年間で大きく様変わりしている。小学校に英語教育が導入され、さらなる低年齢の早期教育もすでに織り込まれている。中学、高等教育機関では従来の知識注入型授業から、生徒主体の参加型授業への転換を迫られており、「英語は英語で教える」というスタイルが施行されている。

国際的人材の育成に向けて、国を挙げての取り組みが急務であることは言うまでもない。これから生きる世代にとって、多種多様な価値観を持つ人々と対等にコミュニケーションをとり、文化共生社会の実現を目指していくのは必要不可欠なことである。ステレオタイプのいえば「人見知り」の傾向を激しく持つ日本人にとっては、大きなチャレンジであり、同時にリスクを伴う転換である。本年ノーベル賞を受賞した物理学者も述べているように、内向志向の若者にどう啓発活動を行っていくかは、社会全体の課題である。いかに困難であっても、私たちはいずれ「多文化共生社会」になることを認識し、歩みを止めるわけにはいかない。

多文化共生社会では、それぞれの文化や民族に属する人々がお互いのアイデンティティを自覚し、尊重するところから寛容さや相互理解が生まれる。

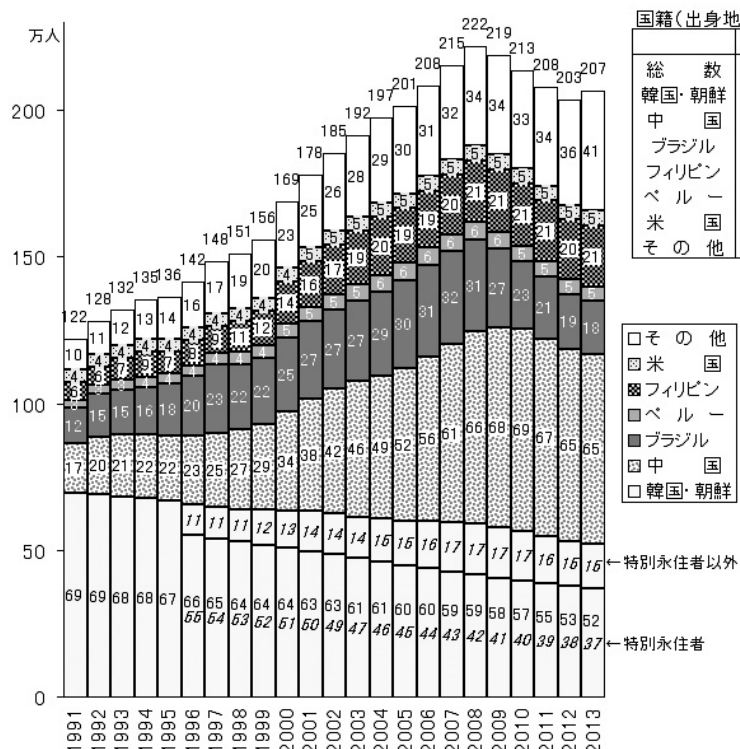
日本における外国人登録者は、数十年来連続的に増加を続け、2009年に初めて減少を記録しているが、その数は218万人を超えている。中でも中国人の増加が著しく、近年の国家間の緊張により若干減少傾向であるが現在も650万もの人が日本で生活している。

在留外国人の推移

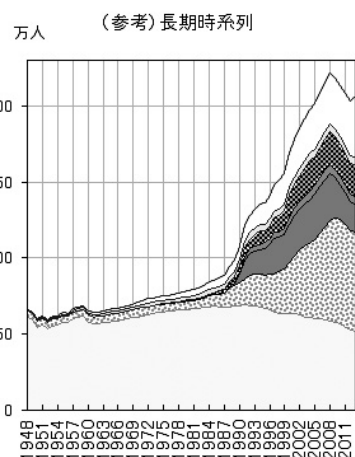
	2004年	2009年	2013年	構成比 (%)
中国	470,940	644,265	649,078	31.4
韓国 朝鮮	594,117	571,598	519,740	25.2
フィリピン	178,098	197,971	209,183	10.1
ブラジル	281,413	264,649	181,327	8.8
ベトナム	25,061	40,493	72,256	3.5
米国	47,745	51,235	49,981	2.4
ペルー	49,483	54,607	48,598	2.4
タイ	28,049	37,812	41,208	2.0
ネパール	4,105	14,745	31,537	1.5

出典) 法務省 報道発表資料2014/3/20 平成25年末(確定値) 公表資料[PDF: 494KB]

在留外国人(登録外国人)数の推移(毎年末現在)



国籍(出身地)	1993年末	2013年末	増減数	倍率
総数	1,320,748	2,066,445	745,697	1.6
韓国・朝鮮	682,276	519,737	-162,539	0.8
中国	210,138	648,980	438,842	3.1
ブラジル	154,650	181,268	26,618	1.2
フィリピン	73,057	209,137	136,080	2.9
ベトナム	33,169	48,580	15,411	1.5
米国	42,639	49,979	7,340	1.2
その他	124,819	408,764	283,945	3.3



(資料) 法務省「在留外国人統計(旧登録外国人統計)」

出典) 社会実情データ図録1170-在留外国人(登録外国人)数の推移

ブラジル人の大幅な減少は、リーマンショック後の雇用を失った労働者の帰国に起因すると考えられる。その後も雇用が回復しないことから、減少は進んでいる。韓国・朝鮮との緊張関係は同国の在留数を減らしている一因であろうが、それよりも、年間1万人を超える日本への帰化数と、本国の少子化の進行に伴う人口の減少という見方ができる。

注目すべきは、フィリピン、ベトナム、タイ、ネパールといったアジアの新興国からの移民が急速に増えていることである。それぞれ国の事情や経済的背景、国家間の相互関係など、取り巻く背景は様々である。ベトナムは、この数年の間に、日本企業の進出が進み、日本語熱が高まった結果、多くの留学生が日本にやってくるという統計がある。その数は4年前の18倍にも上るといふのだから、企業の果たす役割は大きい。留学に関しては様々なトラブルも発生していることが発覚しており、国を挙げての対応が望まれる。フィリピンの労働者人口の日本への流入は年々増えている。世界一の出稼ぎ国でもあるフィリピンの労働人口は日本の注目すべきところである。また、経済連携協定によって受け入れている労働者の数も含まれており、受け入れ国としての態勢がさらに問われることであろう。

こういったアジアの近隣諸国と日本の連携は、日本が経済的、文化的なグローバル化を図るうえで重要な位置を占めている。「アジアの中の日本」としての立ち位置を確立していくことが、今後の日本の発展につながることは文部科学省白書にも随所に表れている。「東南アジア教育大臣機構との連携強化」が国際教育協力推進の柱となり(2013、文部科学白書第1節)「科学技術外交を推進するための国の取組」では、アジア諸国との協力が最優先事項として挙げられている。(2013、文部科学白書第2節)

### 3 広島文教女子大学の現状

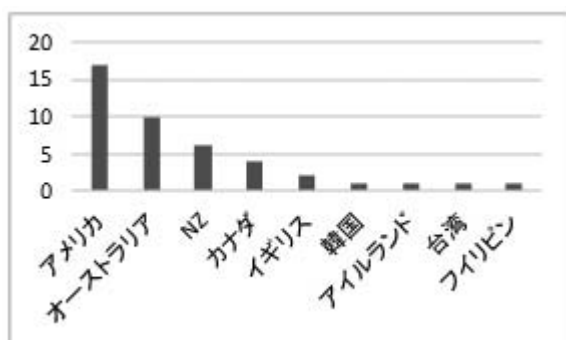
本学が人間科学部にグローバルコミュニケーション学科を設置してから4年になる。国際化の動向を見越しての学科編成や教科カリキュラムの再編は評価されている。また、学生の留学制度の見直しや外国人留学生受け入れの拡充に努め、2008年度に神田外語大学との連携によりBECCという西日本最大の英語教育施設が展開されていることが強みとなっている。そこでは、常時10名以上のNative English Teachersが学生の英語の自立学修をサポートしている。全学で英語教育の推進に取り組み、成果は徐々に上がってきているが、言語習得が第一の体制になっており、学内、学外における国際交流は活発とはいえない。

なぜなら、2014年度現在、本学に留学生は交換留学生も含めて在籍していないことが挙げられる。グローバル化を掲げる大学の姿勢としては頭を抱えなくてはならない事態である。人的交流に欠如する外国語（以下英語）習得は、机上の学修となり生活レベルに降りてこない。英語学修は、学生にとっての目的となってしまう、本来の意義「コミュニケーション手段」だということに到達していないのが現状である。

加えて、独立した留学支援センター組織がないため、学生に対する留学や海外インターンシップへの啓発運動が十分に行われていない。留学プログラムも少ないが、今年（2014年度）本学がメインに掲げている3つの留学プログラムに参加した学生数は20数名である。

このような現状を踏まえ、異文化理解授業を展開するにあたり、グローバルコミュニケーション学科1学年37名にアンケートを行った。

#### ①希望する留学先 グローバルコミュニケーション学科 1年生アンケート（2014年9月実施）

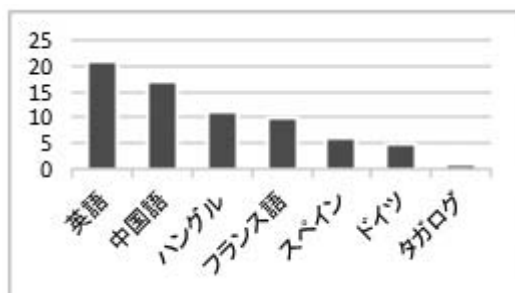


以下、「グローバルコミュニケーション学科学生のアンケート結果」を参照する。

これまでに留学経験のある学生は9名と、4分の1にとどまっているが、経験した学生からは、「視野が広がり、コミュニケーションを取ることにに対して積極的になった」という前向きな意見が寄せられている。また、今後の留学については、95%の学生が希望しており、行先としては①表のようになった。また、大学で学修したい国としては、ヨーロッパ（11人）、次いでアメリカ（9人）と欧米志向が顕著である。

欧米崇拜が根強い背景には、欧米＝世界という認識が根底にある。戦前の白人至上主義はいまなお健在である。英語を母国語とする国や人に対する憧憬は各メディアの影響を多分に受けており、現時点では当然といえる。

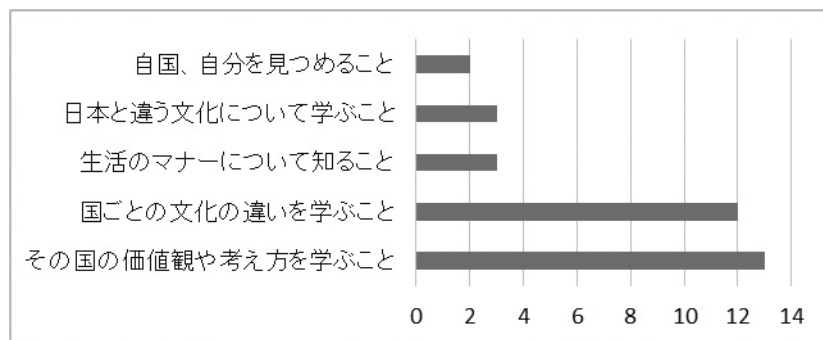
#### ②今後学びたい言語



次に興味深いのは、今後学んでみたいと思う言語についてのアンケート結果だ。（②表）留学先としては国名が挙げられなかったが、学びたい言語として、アジア諸国の言語が選択されていることである。これは、実際の生活の中で接触する機会が多いことや、身近な外国として手軽に行き来できることが要因であろう。

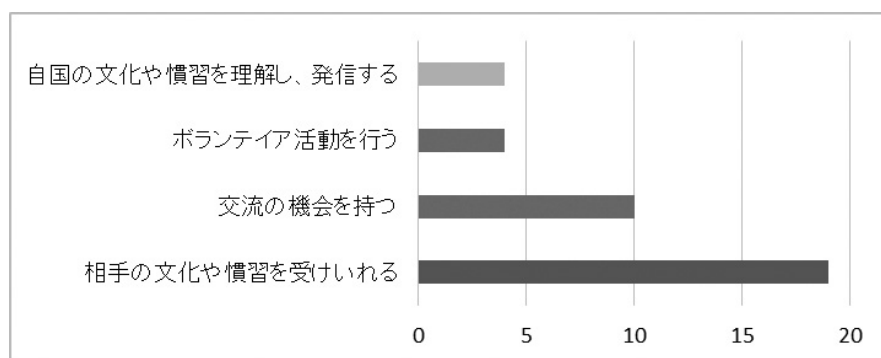


### ③異文化理解とはどうすることだと考えるか



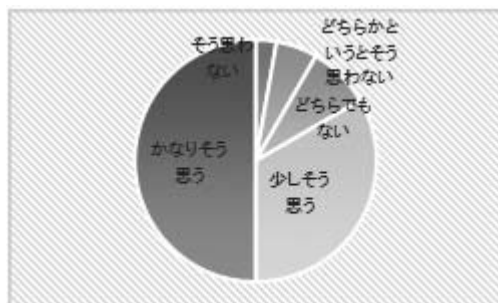
③のアンケート結果から如実にわかるのが、学生が異文化理解というものを旧異文化コミュニケーションが主眼としてきた国家間の相違を知る学問だと、認識していることである。おそらく高等学校までの国際理解教育は、そういったことをねらいとして行われてきたはずである。この点は、大学授業担当者は心得ておかねばならない。

### ④異文化理解を深めるために何をしたらよいか

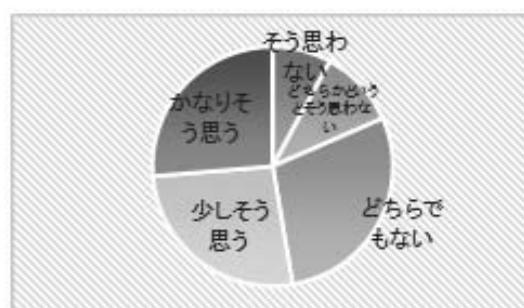


「コミュニケーションを図り、相手のことを受け入れる」といった意見が多かったが、実際にどういうことをするのかまでには言及するに至っていなかった。授業前に手ごたえの十分な学生たちであると見て取れるのは、心強い。しかしながら、実際の内面を探てみると複雑な心理状態が浮き彫りとなり、現実の自分と理想の自分とのギャップにもがく様子がうかがえる。

#### ⑤ 特別な理由がない限り現在の状況生活環境を維持したい

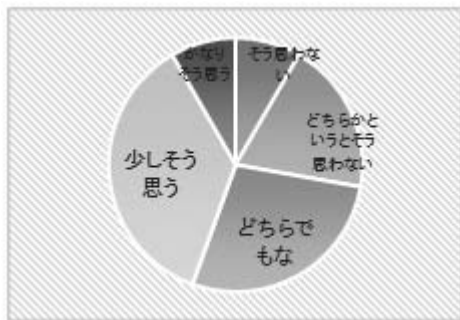


#### ⑥ 新しい発見のために現在の場所を変えて生活するのは苦にならない

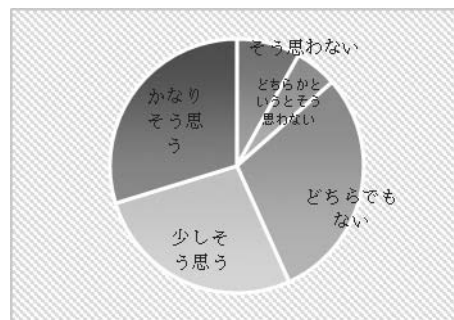


「新しいことにチャレンジしたい気持ちは往々にあるが、一步踏み出す勇気がないこと。語学こそがコミュニケーションツールの大前提であると刷り込まれていること。一方で、日本に外国の人たちが来ることはおおむね好意的であるということ。」といった学生の傾向がうかがえる。

⑦ 英語が話せれば外国人とのコミュニケーションはうまくいく



⑧ 今後の日本社会を支える存在として外国人移民を歓迎する



異文化理解授業では、文部科学省の方向性と合致するアジアを展望する授業を展開することが望ましい。学生たちの内在する欲求とは異なるが、新しい視点を与える好機となるのは間違いない。世界のマーケットや人口を支えるのは、今後アジア諸国であるということを念頭に、アジア各国が国際語として英語を多用し、交流している事実を目を向けていく。日本も同様、日本人の英語という立場で学修し、Japanese-Englishの確立に努める時期にしていると提示する学者もいる。「英語はアジアで学べようまくいく」の著者星野氏は、非常に論理的にその整合性を記述している。第一に、欧米とは異なる気づきや発見があること。物が豊かでサービスも行き届いた成熟した日本から見ると、発展の過程にある新興国には、足りないもの、あったら便利なサービスなどがたくさんあることに気づくことができる。第二に、経済格差、公衆衛生、交通事情、文化、習慣など、留学生としてそこに一定期間住むからこそ分かる社会状況や庶民のニーズを理解できることが多くある。今後ますます存在感が増すアジア新興国での生活を経験しているということは、留学後の大きな財産になる。ビジネスチャンスが見つかる可能性も高く、企業が求める市場がアジアに広がっていることで、経験が生きてくと思われる。(星野竜彦 2013 英語はアジアで学べようまくいく 一部要約) さらに、アジアにおける人脈づくりが、今後の日本の発展につながるという点である。将来的に世界GDPの過半を占めるであろうといわれているアジアのマーケットは、市場の宝庫である。幸いなことに、親日の国が多く、受け入れ環境はよい。大家族的な考え方の強い傾向があるのも特徴で、人脈作りは新規ビジネスにとって不可欠事項である。

## 4 授業実践のアウトライン

異文化理解の本来の目的は、コミュニケーションであることを徹底する。「知識レベル」「情動レベル」「行動レベル」の3つの段階ごとに、教授的学修と経験的学修との融合による授業を展開していく。

### ① Barnga

手始めとして取り組んだのが、一般的なカードゲーム「Barnga」である。「Barnga」は、1980年代に異文化間における葛藤などを疑似体験するシミュレーションとして、西アフリカの街、バーンガでの体験をもとにSivasailam Thiagarajanによって考案された。

今回37名の受講者を6つのグループに分け、そのグループ内でそれぞれ異なるルールに基づいてカードゲームを行った。1ゲームごとに、敗者が別のグループに移動していくことにより、異なるルールが投入される。その中でゲームは無言で行われ、戸惑う中で自分のルールを遂行しながら相手のルールを読み取っていくという環境設定である。違った環境（ここではルール）の中で感じるストレスや違和感がそのまま異文化体験となる。

今回の授業の中では、約半数の学生が、「まったく違うことを始めるので戸惑った。」「ルールがわからなくなりそうだった。」「言葉が使えないので困惑した。」という感想を述べている。残りの学生は、「ルールが似通っていて、それほど困らなかった」「違うルールは別に気にならなかった」という順応性のある回答も得られた。数名であるが、「まったく違うルールの人が突然入ってくる、これが異文化なんだと気付いた」という本物体験に置き換えて理解しようとする学生もみられた。

## ② 言語と非言語

アンケート結果より、「言語能力があればコミュニケーションはうまくいく」と考えている学生が半数近くいたのだが、実際のコミュニケーションは、そうではない。非言語によるものがコミュニケーション全体の65%を占めているという事実には、当然ながら驚嘆する。日常生活の中で、無意識のうちに言語外から多くのことを読み取っているということを想起する手立てを施し、「スピスピゲーム」という非言語活動を取り入れた伝言ゲームを行った。物事を伝達するために必要なのは、「言語」と「非言語」両者の組み合わせが必要であることを体験的に理解した。参加学生Aは、「言葉が使えないことはもどかしかったが、体を使って表現することで何をしたいのかは伝えることができた」さらにTは、「言葉のありがたみがよく分かった。言葉なしでは半分くらいしか伝えられない。」一方、Kは、「ジェスチャーは日本人はあまり得意でない。言わなくてもわかってる、みたいな雰囲気があると思う。」と日本人の気質にまで言及する姿勢を見せ、「だから日本人はコミュニケーションが不得意だ」という論理を組み立てるに至った。

## ③ ステレオタイプ

異文化コミュニケーション学のカテゴリに必ず登場するのが「ステレオタイプ」である。もちろん一定の条件下では有効な提示方法であり、的を得た表現方法でもある。しかし非常に乱雑で非人間的な思考法であることから多くの批判もある。例えば「日本人は仕事中毒である」といった概念を提示されたとしよう。社会全体の特徴を表す上では間違いのないのかもしれないが、あなた自身はそうでないとしたらそれはただの偏見に過ぎない。同様のことを他国で行うと人権問題になることがあるので十分注意したい。「イスラム教は暴力的だ」などという極論を振りかざしてしまうと、大変な人種問題に発展する。あいまいな概念を提示してしまわないことを念頭に、ステレオタイプという考え方を取り扱う必要がある。単一民族で構成されている日本社会は、同質で同系列であることをこよなく愛する民族性を持つ。だからこそステレオタイプを使うことが多い傾向にあり、先入観や偏見に左右されることも多い。ステレオタイプが「限られた情報である」「他人の判断である」「多様性を無視している」ことを授業の中で押さえ、実際の異文化交流の中では、決して濫用してはならないことを確認した。

## ④ 異文化理解講義～3人の在日外国人から～

インド、フィリピン、インドネシアの講師を招聘し、日本とその方の母国とのつながりや自分の経験を通しての異文化理解法などをお話ししていただいた。

- ・「広島インドチャイ倶楽部」代表ジェームズ氏：インドと日本の根本的な文化の違いを明確にし、インド人の視点から見た日本人観を聞くことができた。

Iさんのレポートから「ジェームズさんのお話を聞いて、疑問に思うことがたくさんありました。日本で当たり前のことが、インドでは全く通用しないことがたくさんあるのを知ったからです。何より時間の感覚がかけ離れているので、私がインドの文化に適応するのは難しいかもしれないと思いました。同時に、もっと異文化を知りたいと思っている自分がいます。」

- ・「広島大学大学院言語学科」アイニンさん：インドネシアにはイスラム教徒が多いこと。ご自身もイスラム教徒でその結婚観について語られたのが印象的だった。私たちの考える結婚とは程遠いそのシステムに、学生たちは驚きを隠せなかった。

Hさんのレポートから「一番私が驚いたのは、結婚の決断だ。顔を見ることなく、データの交換をした後で、相手を判断していくシステムは私たちの文化ではありえないことだからだ。アイニンさ



んは、結婚は愛情で決めるものでなく相性で決めるほうがよいと述べていたが、私には受け入れがたいものだった。これをきっかけに、もう少しイスラムの文化について調べてみようと思った。」

- ・「広島大学大学院教授」ローレンス氏：フィリピンはアジアの新興国として注目を浴びている中で、国の内部が抱える問題点を発展と絡めながら詳しく提示してくださった。アジアの中核として日本の存在が非常に重要である、という示唆は、学生に大きな影響を与えた。

Gさんのレポートから「現在のフィリピン人の生活は私が思っている以上に深刻なものだということが分かりました。(中略)美しいリゾート地を活かし、観光をアピールすることで多くの仕事を生み出すような政策が必要だと感じます。そういった問題解決のために自分ができることがあれば考えてみたいと強く思いました。」

この3人の講師との交流は、学生が自らメール交換するなど、個別に継続している。



#### ⑤ 留学生会館「留学生まつり」と「広島国際交流・協力の日」への参加

授業の一環として、学外でのイベント参加を盛り込み、実際の国際交流を実践した。留学生まつりは、留学生会館において毎年秋に行われる恒例の行事で、留学生会館に居を構える200人前後の留学生たちが自国の紹介や展示を行っている。飲食ブースも出ており、珍しい異国の食文化に舌鼓を打つ学生の姿が見られた。中でも、モンゴル、中国、インドネシア、ベトナムなどのブースでは、長時間にわたって質疑応答が日本語と英語で行われており、改めて、学生たちの意欲の高さを実感した。

「広島国際交流・協力の日」は、広島市で最も大きな国際行事である。JICA地球広場の国際ボランティアとして、多数の学生が参加し、様々な国の人やそこに関わる日本人との交流を持つことができる機会となった。



#### ⑥ 異文化シミュレーションゲーム「Bafabafa」

「Bafabafa」という異文化シミュレーションゲームは、1970年代にアメリカのGarry Shirts博士に



よって開発された。もともとはアメリカ海軍の海外ミッションを遂行させるための訓練用に開発されたものが、現在は幅広く異文化対応のトレーニングに応用されている。当初は2国間の設定で文化や価値の違う国をグループごとで演じ、偵察隊を送り込んで相手国の情報を収集しながら、相手国とどのように関係を築いていくのがよいのかを探っていくというものであった。今回私が行ったのは、人数の関係から3か国を次のように設定した。「物質難で役人に生活を制御されている国」「常に陽気で生活に不安のない国」「競争社会で出世が第一の国」である。調査団が2回に分けて隣国を偵察し、国の文化の違いを報告する。この報告会が重要な位置を占め、他国との違いを分析し、さらにどのようにこの違った国と交流していくのかを探る。学生たちは、役割の中で様々な反応を見せたが、調査一次段階では、相手国の文化を否定する意見が多かった。「怖い文化だと思った」「この国の人が何を考えているのかが分からなかった」一方、調査団を受けている側は、調査隊を「邪魔だと感じた。」「無視された」という感想が出た。2回目の調査では、相手国の情報が事前にあるためか、より詳しい報告がなされたが、どのように接したらいいかの積極的意見は少数であった。これは、異文化におかれた際の日本人の特徴であるといえる。自分の国との文化の違いは明確にすることができるが、それらを受容する態度は極めて低く接点をなかなか見いだせない。一人の学生が、授業が終了してからそのことを告げに来た。「相手の国のことはわかってきたけど、自分のルールを当てはめたらうまく交流できない」と。まさに今の日本の現状ではないだろうか。己の弱点を知ることができる姿勢は今後の活動に十分効果が期待できる。

今回、国の設定や言語設定に条件を設けることが、学生の反応をより促すのではいかという反省点が生まれた。今後につなげるためにゲームの改善を図っていく。



## 5 広島文教女子大学から多文化社会への発信

ヒトのグローバル化は、日進月歩である。私自身10年余を海外で過ごした経験があり、様々な価値観や慣習に出会って、悩み、驚き、得心したものだ。そして、最終的には、やはり日本人なのだ、という自分のアイデンティティに回帰するというスパイラルを幾度となく繰り返してきた。

国際化の波に乗ろうと自治体も各教育機関も、企業も、後押しするメディアも、馳ごっこのように国外の出来事を追いかける。しかしながら、ヒトのグローバル化が拡大しても、相互文化の多様性や価値観を理解し合い、対等なコミュニケーションが取れているかというとはなはだ疑問が残る。私たちが直面しているのは、「見える文化」に過ぎないからだ。日本でいうならば、「ゲーム」「おたく」「すし」「相撲」「着物」といったような視覚に訴えるものを共有し、理解したような気持ちになっていることばかりがクローズアップされているだけだ。一方、「お詫びの仕方」「空気を読む」「時間の概念」など、目に見えない部分で構成される日常は、コミュニケーションの様々な問題を引き起こしている。人と

ぶつかった時に思わず「ごめんなさい」とつぶやく日本人は、欧米では困ったことになる場合がある。時間に正確な日本人は、その感覚でメキシコに行くと大変なストレスを抱えるであろう。オーストラリア人との会議の場で、空気を読んで発言を控えると、仕事のできない人と思われてしまうのである。

「多文化共生社会」の実現は、遠き道のりである。英語教育の充実が重要視されているが、コミュニケーションは非言語によるものが6割を占めている。その6割が、実際のコミュニケーションの場面で、相手との距離を縮める役割や、交渉の礎となるのだ。その人の持つ主体性や、チャレンジ精神、協調性が問われている。

このような要請に対し、英語教育の充実はもちろんだが、異文化間コミュニケーショントレーニングの手法を取り入れることによって、学生の多文化への視野を広げ、グローバル人材を育成する基礎を築くことが必要である。自己理解から始まり、自己啓発を促すことによって、自分とは異なる文化背景や価値観を持つ他者を尊重することができるというゴールに向かって、本学の授業を構成してきた。今後も、反省点に基づき、試行錯誤を重ねて新たな手法を見出しながら、異文化理解活動の推進に貢献していきたい。

### （参考文献）

- 鳥飼久美子、野田研一、平賀正子「異文化コミュニケーション学への招待」（2011） みすず書房  
亀山郁夫（2013）「グローバル化時代の人材育成と多文化的想像力」東京外国語大学基調講演  
青山 亨（2013）「専門人材養成は大学の社会的責任」東京外国語大学多文化教育研究センター  
広島市在留外国人統計 広島市ホームページ  
瀬田幸人（2007）「異文化理解教育で扱うべき文化要素について」岡山大学教育学部研究収録  
高本康子、園田智子（2011）「異文化コミュニケーション・トレーニング」に関する実践報告 群馬大学国際教育・研究センター論集  
張 競（2011）「異文化理解の落とし穴」岩波書店  
岩船展子、渋谷武子（2005）「素直な自分表現 アサーティブ」PHP出版  
野間佐和子（2001）「異文化はおもしろい」講談社選書  
毛受敏浩（2003）「異文化体験入門」明石書店  
原沢 伊都夫（2013）「異文化理解入門」研究社  
松尾貴史（1991）「experiencing foreign culture through a game-simulation」愛知淑徳短期大学研究紀要より  
田中一嘉（2011）「das interface zwischen fremdsprachenunterricht und interkulturellem verstandnis」群馬大学教育学部紀要より  
星野達彦（2013）「英語はアジアで学べばうまくいく」  
JETRO海外調査部（2013）「AREA Reports ～フィリピン 従業員の定着率を高めるためには～」外務省 world report  
総務省 在留外国人統計

### （NGO団体）

- |             |   |
|-------------|---|
| ひろしま国際センター  | <a href="http://hiroshima-ic.or.jp/">http://hiroshima-ic.or.jp/</a>   |
| 広島フィリピン友好協会 | <a href="http://www.hpfriendship.com/">http://www.hpfriendship.com/</a>   |
| 広島ベトナム協会    | <a href="http://www11.ocn.ne.jp/~hva/">http://www11.ocn.ne.jp/~hva/</a>   |
| 広島シンガポール協会  | <a href="http://www.asahi-net.or.jp/~wi4y-hsmt/HSAreport2012J">http://www.asahi-net.or.jp/~wi4y-hsmt/HSAreport2012J</a> |
| 日印協会        | <a href="http://www.japan-india.com/">http://www.japan-india.com/</a>   |